

何か倫理的なもの——濱井修先生を送る

森 一 郎

濱井修先生は、1998年4月に本学哲学科に着任され、以来、この大学のために献身的に尽くされた。それ以前に勤務された東京大学での長い年月には到底及ばないものの、七年間にわたって先生と職場を同じくする機会に恵まれたことは、われわれ本学に奉職する者たちの誇りである。先生ご自身、一人の「卒業生」として女子大を去る心持ちだとはのご感想を、『学報』3月号で洩らしておられる。哲学者ならではの皮肉の精神にとむ先生のお言葉ゆえ、どこまで真面目に受けとってよいかは解釈の分かれるところであろうが、私は一読して、額面通りに受け止めようと思った。先生が、犠牲と奉仕の精神さながら、「第二の母校」のためひたすら尽力される姿に接した一人として、素直にそう感じたのである。

今、哲学者という言葉を使ったが、濱井先生のご「専門」は、広義の哲学を形づくる諸部門のなかでの、「倫理学」である。では、倫理学とは何か。倫理学者とは何者か。昔から私にはこれがさっぱり分からなかった。それどころか、哲学とわざわざ区別して倫理学なる学問分野を「定立」すること自体、「純粹哲学」を気取る講壇哲学の旧弊と同様、哲学にとって冒瀆的だとすら思っていた。だが、この七年のあいだに私の考えは変わった。倫理的なものの探究という生のかたちが、独自の意義をおびて立ち現われてきたのである。私は持説の撤回を迫られた。そのきっかけとなったのが、濱井先生の存在であったことは言うまでもない。

先生は、本学在職中に紀要に継続して掲載された論考を一書にまとめられて、退職される直前に出版された。『倫理的世界の探究』と題された本書では、和辻、レーヴィット、ポパー、ライル、ミード、ウェーバーといった思想家の所説が検討され、副題にあるごとく「人間・社会・宗教」の諸相に光が当てられる。現代日本の倫理学界を永らくリードされてきた先生のこの研究集成が、東京女子大学学会研究叢書（モノグラフ）の一巻として公刊されたことは、本学学会としてこのうえない慶事だが、そうはいっても、本書を卒読した読者が「倫理的なものの探究」を修めたことになるとは考えにくい。それは何も、このモノグラフがたんなる入門書分的分かりやすさをめざしていないからではない。むしろそれは、著者が、倫理的なものを語ることに對して独特の「禁欲」の態度を一貫して保持していることによる。あたかも著者は、倫理学とは何かという問いへの答えを性急に求める者を、言外に戒めているかのようである。

本書の（最後に執筆された）「序節」では、ウィトゲンシュタインの倫理学観が紹介

されている。それによれば、事実の世界と異なる絶対的な価値や人生の究極の意味について語ろうとする倫理的命題はすべて、言語の限界に逆らって世界を超え出ようとしているがゆえに、端的に「無意味」だということになる。倫理についてひとは語るができない。——「倫理的世界の探究」にとっておよそ破壊的としか見えないこうした問題提起を、本書の冒頭で誠実に受け止める著者は、しかし、語りえないものをそれでも語ろうとする人間的努力としての倫理学の意義に、なお賭けようとする。その真摯な探究の姿に、「語りえないことについては沈黙しなければならない」との禁欲主義を唱えながらもその語りえない事柄に向かって思考することに生涯を捧げた、かの哲学者の知的努力に通じるものを感じてしまう読者は、私一人ではあるまい。

日々の礼拝を毎年一回欠かさず受け持たれてきた濱井先生は、昨年暮れ、最後の奨励を担当された。その講話のタイトルは「語り得ぬこと」であった。倫理的なものが言語化不可能なものに属しているとすれば、それについて語り、探究することは、徒勞以外の何物であろうか。しかし他方で、ウィトゲンシュタイン自身、「語りうる事柄」と「おのずと示される事柄」とを区別している。この区別をあえて適用すれば、倫理的なものは、「語られるのではなく、おのずと示される事柄」に属することになる。純然たる事実のように記述され正誤の判定に服するものではないが、しかし、何らかの仕方ですのただなかにおのずと示される「或るもの」。その「何か」は、独自の真なる現われ方をおびて、われわれの前に姿を現わす。だとすれば、「美的なもの」といい「聖なるもの」といい、レットルこそ異なるものの、生の輝きを形づくる真実のあり方というものが、なんといってもこの世には存在するのではないか。

何か倫理的なもの——そのような「或るもの (Etwas)」の存在に気づかされたことは、私にとって驚きの経験であった。その名状すべからざる何物かを、ひとは「教養」と呼んだり「人格」と呼んだりする（もっと大がかりな別の表現もあろうが、ここでは措く。「教養人」とか「人格者」とかいった語は現代では廃語に近いが、そういう古風な言葉を、柄にもなく使ってみたくなる。今日これらの形容が不人気なのは、そこに「差別」の含意があることに、人々が敏感だからではないだろうか。「教養人」は、素養のない者に劣等感を抱かせるし、「人格者」は、品位を欠いた者に羞恥を感じさせる。「同じ人間にそんな違いなどあるはずがない。いや、あってはならない」とかたくなに叫ぶ平等主義者には、人に倫理的な何物かがそなわると肯んずるなど、それこそ人権侵害もいところだろう。だが、そういう語りえない何かが歴然とおのれを現わす現場に立ち会えば、ひとはその何かの存在を信じることを学ぶし、その臨在を前にしてまずは「黙ること」を学習するようになる。

黙示されるべき「或るもの (Something)」を信ずること。言うまでもなく、この教えは、宗教上の特定の教義などではなく、東京女子大学の卒業生すべてが学んできた良き伝統にはかならない。その気風の健在ぶりをまさに身をもって示された濱井先生にとって、やはり本学は、れっきとした「母校」と言うべきなのだろう。